

八重瀬をつなぐ原点

【第二章】

響け うまんちゅの魂

大地に感謝し、祖先を敬い、お互いを思う心。

八重瀬には今なお受け継がれている先人達の心(ククル)・偲(ウムイ)があります。時にそれは、民衆を動かす原動力となり、心のよりどころとなります。その心は私たちの中に脈々と息づいています。

沖縄自由民権運動の父・謝花昇

(一八六五年～一九〇八年)



明治の中期に、わが身を振り捨ててうちなーんちゅの権利のために戦い、沖縄開放運動の先駆者として今なお語り継がれている人物が八重瀬町にいました。その名は、義人 謝花昇。

謝花昇は沖縄自由民権運動の父と呼ばれ、農政・税制にも多大な功績を残しました。

「不撓不屈の精神」「まけじ魂」「謝花魂」

謝花昇ってどんな人?

謝花昇は一八六五年、字東風

平の農家に生まれ、第一回県費

留学生として学習院大学や東京帝國農業大学(現・東京大学農学部)で学び、沖縄最初の学士とな

て県技師に任命され高等官とな

りました。平民出身で沖縄初の農学士、そして高等官となつた

謝花昇は、県民の尊敬の的となりました。

しかし、杣山問題(藩有林開墾)をめぐり時の権力者と激しく対立、職を辞して県民の参政権獲得運動に力を注ぎますが、志し

得運動に力を注ぎますが、志し半ばで悲運の最期を遂げました。

自由民権運動へ

民謡「汗水節」が生まれた時代

働く喜びを歌い、社会奉仕を説く教訓歌 民謡「汗水節」



汗水節之碑(仲本稔さんの生誕80周年を記念して建立された)

「汗水節」が誕生した昭和三年頃の沖縄は貧窮の真っ只中で、新天地を求め移民ブームが続いていました。県では沖縄県振興計画を実地し、農民に自力更生・勤儉貯蓄を奨励していました。そのような中、沖縄県は昭和天皇の即位を記念した事業の一環として勤儉貯蓄の論文・民謡・童謡の募集が行われ、民謡の部で三位(一位二位の該当はなかつた)に入選したのが「勤儉力行の獎」で応募した字仲座出身の仲本稔氏(当時二十三歳)でした。その後「汗水節」と改題され宮良長包氏により作曲されると、県民に広く知られ歌われるようになりました。近年では、汗水節の歌に振りが付けられエイサーや創作舞踊などで踊られています。本町では、その心を実践しようと毎年、清掃活動を行う「汗水節行動デー」や後世に歌い継いでいます。

作詞者 仲本稔

「成し業ん終て子や子孫榮え

七十坂のぼりて別りさびら」

仲本稔氏が亡くなる四年前(一九七三年)につくった辞世の句です。いた人生何も思い残すことはない。自ら汗水節の歌心を実践し生きた仲本氏の人柄が現れています。



作詞者 仲本 稔 氏



県内各地で、それぞれに振りが付けられ踊り継がれています

受け継がれる文化の心

八重瀬町は伝統芸能が盛んなまちです。旧盆や旧暦八月十五日には各地域で多彩な民俗芸能が催されます。いずれも豊年満作や無病息災を祈願するものが多く、今日まで受け継がれています。本町では町内各地に伝わる伝統芸能をかけがえのない財産として、その保存・継承・発展に力を注いでいます。



本町の取り組み

本町では、謝花昇の威徳を後世に継承するため、これまでに、生誕一三〇年記念事業や資料展示室の開設、謝花昇資料集・マンガ本の刊行、民権百年祭などを行つており、今後も継続的に顕彰事業を行つてきます。

謝花昇によつて灯された参政権運動は、謝花が没してから四年後の一九一二年に実を結びました。参政権を獲得したのは、本土から遅れること二十二年後のことをとした。